

我助福、使用御鏡安置此處、其鏡卽化爲石、見在此山中、因名曰鏡山焉。又見河海抄玉鑿

〔萬葉集三挽歌〕河内王葬豐前國鏡山之時、手持女王作歌三首。○一首略

王之親魄相哉、豐國乃鏡山乎宮登定流。

豐國乃鏡山之石、戶立隱爾計良思、雖待不來座。

〔源氏物語二玉十二〕おりていくきはに、うたよま、ほしかりければ、や、ひさしう思ひめぐらして、

君にもし心たがは、松浦なるか、みの神をかけてちかはん。○下略

〔源氏物語湖月抄二玉十二〕君にもし、花肥前國松浦郡鏡明神は太宰少貳藤原廣繼が靈也、又か

がみ山は神功皇后の御か、み化して石となれるを、鏡山といへり、これをも鏡の神と云べき

にや、○下略

肥前國
領中磨山

〔書言字考節用集二乾二坤〕領中磨山肥前松浦郡、佐用媛重迹見萬葉

〔萬葉集抄五〕肥前國風土記云、松浦縣之東三十里、有岐搖峯、岐搖此云最頂有沼、計可半町、俗傳云、昔

者檜前天皇之世、遣大伴紗手比古領任那國、于時奉命經過此墟、於是篠原村篠原農也有娘子、名曰乙等

比賣、容貌端正、孤爲國色、紗手比古便嫂成婚、離別之日、乙等比賣登此峯、舉幟招、因以爲名、

〔西遊雜記七〕巾振山は、相傳ふ、松浦佐用姬夫宿禰、狹手彦渡唐を悲み、此山に登り、漕行く船をえた

ひて、終に石となりしといふ説を傳へて、今望夫石と號し、婦人の被して伏たる形の、凡四尺計も

あらんと覺しき石あり、昔は谷底にありしを、小堂を建其中に入れて、今有る所に移しあり、旅人

此石を見んと思ふ時は、麓の寺に寺號行て、開帳代として三十銅にても五拾銅にても出して、鍵

をかりて戸を開き見也、中華にも望夫石の事跡有、夫を聞傳て、此所にも似像石の有しを幸とし

て、埒もなき説を傳へし者成べし、婦人の化して石となりしとは、あまり成異説を云傳しものな

り、